



大久野玉の内地区では毎年8月の第2土曜日に、**風祭獅子舞**が奉納されます。この獅子舞は雨乞獅子とも呼ばれ、かつては雨乞いなどにも奉納されていたそうです。演者は頭に獅子頭を被りおなかに太鼓を括り付け、1人で1匹の獅子を演じ、3匹の獅子が同時に舞います。このような系統の獅子舞を「一人立三頭獅子舞」や「風流獅子舞」などと言い、関東地方を中心に東日本で主に伝承されているもので、町の文化財に指定されています。

玉の内の獅子舞に関する古文書類は、残念ながら明治15年(1882)の大久野焼けで焼失してしまいました。幸いなことに獅子頭が3組残っていて、内2組に銘が見え、1組には文化7年(1810)と判断できる墨書が確認できます(現在の獅子頭は新調したもので、当時のものは保存会によって大切に保管されています)。また、装束入箱の蓋裏書に弘化3年(1846)、文久2年(1862)の年号があり、この頃には既に舞われていたことがうかがえます。

玉の内の獅子舞は例年、昼過ぎに獅子宿である玉の内会館を出発し、まずは下庭場がある三嶋神社へ向かいます。神社で神事を執り行った後、1回目の舞が奉納されます。次に、玉の内川沿いの道を練り歩き上庭場へ向かいます。そこで2度目の舞を奉納し、再び玉の内会館にもどります。会館は中庭場にもなっていて、夜から最後の舞が奉納されます。中庭場で奉納される舞は最も長く、全ての演舞が終わるには深夜の11時頃まで及ぶそうです。

# 玉の内の獅子舞